

Title	Valenz理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について：特にG.HelbigとW.Bondzioの理論的対立をめぐって
Author(s)	井口, 省吾
Citation	ドイツ文学研究 (1979), 24: 18-42
Issue Date	1979-02-17
URL	http://hdl.handle.net/2433/184965
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

——特に G. Helbig と W. Bondzio の理論的対立をめぐって——

井 口 省 吾

Valenz 理論には今日においても依然として曖昧にされたままになっている二つの問題がある。その一つは、

1. ある動詞の Valenz は一体いくつあるのか、それはどうして決定されるのか、

という問題であり、他の一つは、

2. Valenz による文の記述モデルに投入される共演成分 (Mitspieler) の意味関係はどうなっているのか、

という問題である。前者は Valenz とはそもそも何なのかという基本問題であり、後者は Valenz 理論の意味論を問うことになるであろう。

私見によれば、従来の Valenz 理論でこの二つを徹底的に追求したものは少ない。そのために一部の研究者の中には、Valenz 理論がある意味では、かつての英語教育における Ch. Fries の文型論のように、長所と短所を合わせ持つ言語のパターン化だという認識を欠き、無反省な Valenz 信仰をドイツ語教育に持ち込むおそれがないとはいえない。また、最近のように Valenz 理論に意味論が持ち込まれて、いわゆる「意味論的」Valenz 構造と自然言語の構文論的 Valenz 構造とを直結して考えるような傾向が

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

出てくると、具体的な自然言語の文法的事実が無視されたり軽視されたりすることが無いとは限らない。このあたりで Valenz 理論の本質に多少の考察を加えておくことは必要だと考える。

まず Valenz 現象にみられる「揺れ」ということを具体的なドイツ語の動詞 *helfen* を例にとって考えてみる。

東ドイツの Helbig/Schenkel の Valenz 辞書によると、⁽¹⁾ *helfen* の必須共演成分 (*obligatorische Valenz*) は 1 個、主語だけである。

Der Freund hilft. Die Polizei hilft.

Das Medikament hilft. Der Ratschlag hilft.

Das Schwimmen hilft.

などの文は、他の共演成分をつけなくとも、それだけで「文法的に完全な文」とされている。例外として、主語が人間以外の動物である場合には、

Der Polizeihund hilft bei der Verfolgung des Verbrechers.

のごとく、前置詞 *bei* に始まる副詞句を第二の必須共演成分としてつけなければならない、と書いてある。

他方、西ドイツの Engel/Schumacher の Valenz 辞書では、⁽²⁾ *helfen* は 2 価の動詞とされている。すなわち、*helfen* は主語の他に三格目的語を必要とし、例えば、

Der Rettungsschwimmer hilft dem Ertrinkenden.

としなければ「文法的に完全な文」ではないと考えている。ここでもまた例外があって、前置詞 *bei/gegen* に始まる副詞句がつけ加えられると、必須共演成分たる三格目的語は消去可能となり、*bei/gegen* に始まる副詞句が新たに必須共演成分となって「文法的に完全な文」ができあがる。例えば、

(1) Helbig/Schenkel: Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. 1978.

(2) Engel/Schumacher: Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 1976

Der Ehemann hilft beim Kochen.

Das Feuer hilft [dir] gegen die Kälte.

Engel/Schumacher には、この興味深い三格目的語と副詞句との交替についての説明は何もない。恐らく基礎資料として使った Mannheimer Corpus の中に、三格目的語を欠き、しかも、bei/gegen に始まる副詞句を伴った文例が数多く見出されたという事情から、このような例外の付記となったものであろう。

東ドイツの Helbig/Schenkel の辞書では、gegen に始まる副詞句は共演成分でも何でもなく、完全な自由添加成分 (freie Angabe) であり、Valenz 構造には関係のない成分なのに、西ドイツの Engel/Schumacher では共演成分であり、三格目的語を消去する場合には必須共演成分に転成している。

この二つの Valenz 辞書は、それぞれの国で外国人にドイツ語を能率的に教えるための基本的教材として編纂されたものであり、特に Engel/Schumacher は西ドイツで学んだり働いたりする外国人に課せられるドイツ語検定試験の出題資料でもある。⁽³⁾ そのために強い規範的性格を持っているのだが、二つの規範辞書の不一致は外国人学習者を大いに悩ませる。

しかしながら考えてみると、ドイツ語の規格化を狙って編纂された二冊の Valenz 辞書が、はしなくも見せてくれた Valenz 現象の「揺れ」は、Valenz 現象の本質と、自然言語のパターンの歴史的な性格を印象的に示している。私見によれば、Valenz 現象は言語集団がその時どきに特徴的に示す認識の Gestalt に起因する構文論的パターンであって、当然のことながら、歴史的・経験的、かつ、周辺のぼやけた fuzzy な現象である。一般に Valenz 現象が強いと考えられているドイツ語においてもこのことは例外ではない。従来の Valenz 理論では、構文論においても意味理論におい

(3) Engel/Schumacher の Einleitung 参照。

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

でも、この fuzzy な本質の究明が遅れていて、きわめて硬直した議論が性急に展開されてきた憾みがある。ここでは西欧的な構文論の伝統を引く G. Helbig の Valenz 理論と、東欧的・ロシアのコミュニケーション理論の影響の濃い W. Bondzio の、いわゆる「意味論的 Valenz 理論」を考察しながら、Valenz 現象の「揺れ」とその構文論、ならびに意味論について考えてみたい。

Helbig の理論は、後述する Bondzio の理論と違って、Herder Institut で外国人にドイツ語をいかに能率的、かつ、効果的に教えるかという教育実践上の必要から生れたものである。⁽⁴⁾ 外国人は、

Ich trinke. Ich höre.

という文型をまねて、平気で

*Ich besuche. *Ich gebe.

ということがある。後者は「文法的に間違った文」だと Helbig は考える。彼の考えでは「少くとも」、

Ich besuche den Freund. Ich gebe dem Lehrer das Heft.

としなければ「正しいドイツ文」とはいえない。共演成分が必要だというのは他動詞に限ったことではなく、

*Das Institut bestand.

も間違いで、正しくは

Das Institut bestand in dieser Stadt.

Das Institut bestand schon lange.

と場所や時間を規定する副詞(句)を補わなければ正しい文ではない。また、外国人は、

*Ich erblicke ihn kommen. (erblicken ← sehen)

(4) Helbig/Schenkel の Einführung 参照。

- *Er fragt den Weg. (fragen ← erfragen)
 *Er konnte so nicht machen. (so ← es)
 *Er erzählte das Abkommen. (erzählen ← schildern)

といった文もつくる。⁽⁵⁾ 恐らく、意味の似通った他の動詞の用法をそのまま使ったか、外国人の母国語、ないしは得意な外国語の文法が影響したかに違いないドイツ文で、ドイツ人には直観的に「間違った文」であることがわかるという。動詞の構文論的特性に関するこのドイツ人の直観を ein fester Regelmechanismus として explizit に記述できないものか、というのが Helbig の目標であった。

この Regelmechanismus の記述は「文法的に完全な、正しい文」であるために定形動詞が伴わねばならぬ共演成分の数とその構文論的な特性、ならびに共演成分の意味範囲まで定めているものでなくてはならない。例えば、fragen という動詞は人称主語を必要とし、主語の意味範囲は「人間を表わすもの」でなくてはならない。時に抽象名詞を主語に使ってもよいが、その場合、抽象名詞は擬人化されていると考えねばならない。四格目的語を使ってもよろしいが、その意味範囲は主語と同じように「人間を表わすもの」でなければならない。抽象名詞が目的語に使われた場合は、これも擬人化されている。この動詞は四格目的語のかわりに nach を使った前置詞つき目的語をつけることもできる。その場合、nach の次には「人間を表わすもの」でも、たずねられる「事項」でもつけてよろしい。「事項」をたずねる時は、他に ob に始まる目的節を使うこともできる。(したがって、ある人にある物や事項をたずねる時には、jn. nach etwas/ob ~ fragen となるわけである。) fragen は「たずねる」の他に「たずね求める」という意味もあるが、その場合には um に始まる前置詞つき目的語を使わねば

(5) 右側のヒントは筆者の説明。

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

ならない、等々である。

このような動詞の構文論的特性と共演成分の意味範囲という考え方は特に目新しいものではなく、中世から存在しているし、大ていの文法書は格支配を中心にその大略を述べている。⁽⁶⁾ 副詞規定についても、文献学的伝統に立つ大型の専門辞典のなかには、驚くほど綿密に共演関係を記述しているものがある。⁽⁷⁾ Helbig の新しさは「文法的に完全な文であるために備えなくてはならぬ条件」という見方をした点である。Brinkmann, Erben, Glinz, Grebe など基本文型論をドイツで展開した人々も Helbig と同じような動詞の共演成分論を開発しているが、彼によると「文法的完全性」を判定するための客観的基準を持ちあわせず、「完全性」はまったく研究者・論者の直観にもとづいて判断されているという。

そこで Helbig が客観的に文法性を判定するためにとった方法は、ドイツの Valenz 理論家としてはきわめてユニークであり、それは生成変形文法の構文論を使って、深層構造と表層構造という二つの構造を仮定することであった。しかし、その結果としてわかったことは、図 1 のように格文法にもみられる多項の一階述語関数構造 $f(x, y, z, \dots)$ を想定し主語の優位性をも認めまいとする彼自身の Valenz 理論に反するものであった。彼はその結果と自説との矛盾を明確に意識していないように見えるが詳細に彼の行ったテストを検討してみればこのことは明白である。彼のテストによれば次の文は、

(1) Mein Freund | wohnt | in Dresden. (wohnen 2)

-
- (6) Valenz 理論の歴史は、Bräuer, R.: Die Valenztheorie. Ihre Geschichte, ihr aktueller Stand und ihre Möglichkeiten. In: Wiss. Zeitschr. d. Humboldt Uni. Ges.-Sprachw. R. XIII (1974) 3/4 にくわしい。
- (7) 例えば、Benecke/Müller/Zarncke: Mhd. Wörterbuch. 3Bde. 1861 などはその展型的なものであろう。

- (2) Er legte das Buch auf den Tisch. (legen 3)
 (3) Er wartete auf seinen Freund. (warten 1+(2)=3)
 (4) Er stieg in die Straßenbahn ein. (einsteigen 1+(1)=2)
 (5) Er aß sein Brot [in der Schule]. (essen 1+(1)=2)
 (6) Er besuchte uns [am Vormittag]. (besuchen 2)

となる。実線を引いた文肢は必須共演成分で表層の「完全な文」をつくるために欠かせない文肢，点線を引いた文肢は共演成分で Valenz と関係があるが，表層ではこれを欠いても「完全な文」と見なされる。括弧の中の文肢は自由添加成分で Valenz とは関係のない文肢である。共演成分と自由添加成分の区別は，文の深層構造として図2のような句構造を想定することによってなされた。

図1

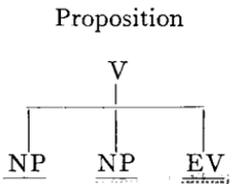
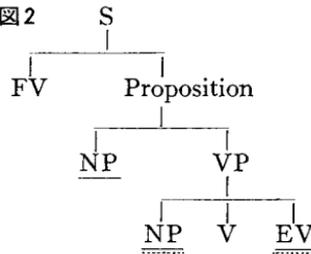


図2



S=文 FV=自由添加成分 NP=必須共演成分
 NP=共演成分 EV=必須共演成分 EV=共演成分

自由添加成分は動詞句(VP)に従属しない文副詞と理解されており，「完全な文」(Proposition)は主語(NP)と述語部(VP)の二要素から成り立っている。主語以外の共演成分は一括されて述語部分に従属させられている。彼が図1のような句構造を想定せず，なぜ図2のような構造を想定したのかはよくわからない。図2はNPとVPとからPropositionが出来あがっ

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

ている図であり、まさに彼が伝統文法の図式とか、Brinkmann 式だとかいって批判する構造である。Proposition などという術語を使用しているところを見ると、恐らく彼は自由添加成分を論理学でいう Satzoperator として解釈しようと考え、共演成分を VP の直接構成素 (immediate constituents) と考えて見ようとしているようである。このような一種の述語論理を深層構造に想定したのは、深い論理的な思索の結果なのか、あるいは、同種の深層構造を想定する生成変形文法理論のたんなる模倣なのかはわからない。意味論に Semantische Merkmale を採用しているところを見ると生成変形文法の考え方が大きく影響していることは疑えない。しかし、述語論理にしても生成変形文法理論にしても実は彼のいう Valenz 理論と直接の関係があるとは思えないものである。

自由添加成分を Satzoperator として Proposition から分離させるには、次のような変形操作を行なう。

- (1') *Mein Freund wohnte, als er in Dresden war.
- (2') *Er legte das Buch, als er auf dem Tisch war.
- (3') Er wartete, als sein Freund da war.
- (4') Er stieg ein, als die Straßenbahn kam.
- (5') Er aß sein Brot, als er in der Schule war.
- (6') Er besuchte uns, als es Vormittag war.

(1') と (2') は、副詞句を文副詞節に変形してみたところ、原意を再現しない文になるのみか、主文が「非文法的な文」になっている。(この点については後述するように問題がないわけではない。) ゆえに、(1) (2) の副詞句は文副詞句ではなく述語部に属するものと判定される。(5) (6) の変形 (5') (6') は原意を再現し、かつ、主文は「文法的に完全な文」であるから、(5) (6) の副詞句は文副詞句 (Satzoperator) であって、述語部に従属して

いるものではないと判定される。

この方法が必ずしもうまく行くとは限らないということは、(3') (4') を見るとわかる。ここでは主文と副文の主語が別になっていて、文副詞節とも述語従属節ともとれるような変形が行われている。Steinitz も述べているが、⁸⁾ 副詞句は意味的に主語に関係づけられている時は大たい文副詞であり、そうでなければ述語部に従属することが多い。(3') (4') では副文が主文の主語から切り離されていて、Satzoperator のテストとしては妥当ではない。副詞句は大たいの場合、文副詞句とも述語副詞句ともとれるような意味内容を持っているので、文副詞句の抽出にあたっては、否定変形や枠構造によるテストなどを併用して相当慎重でなければならないが、Helbig の変形操作はこの点を十分に考慮しているとは思えない。(3) (4) は、むしろテストないし変形不能としてよろしいのではないかと思われる。(6') は副文の主語 *es* が主文の主語をつつみ込むような意味内容を持っているので、文副詞節と考えてもよいだろう。

Helbig のやろうとしたことは、要するに文肢の構文論的カテゴリーの判定であり、カテゴリー文法的にいうならば、S/S (文にかけられ文をつくる関数) をドイツ文の中から変形操作によって見つけ出し、それを Valenz 構造とは関係のないものとして排除した、ということだけである。とすると Valenz は Proposition の内部のものに限るということになり、Proposition を構成する最小限の要素ということになる。ところで Proposition の構造を図 1 のように想定すると Valenz とは Argumente と Funktor との関係ということになり、Argumente の数とか性質とかが問題になりうるが、図 2 のように考えると多彩な Valenz 構造というものは無くなってしまった。図 2 では、Proposition は NP と VP だけで出来あがっ

(8) Steinitz, R.. Adverbialsyntax. Studia Grammatica Bd. X 1969.

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について
ている。論理的な構文は NP と VP さえあれば「完全な文」なのだ。これによると、

*Ich besuche. *Ich gebe.

は、「完全な構文」の条件をみたしているといわなければならない。述語部がさらにいくつかの下位カテゴリー（目的語、副詞句など）に展開されているということは、少くとも「完全な文」(Wohlgeformtheit) とは関係のないことである。問題は意味論的にみて、その述語部がある世界でのある状態を有意義に再現しているかどうかということである。(この場合、世界とは、時間や場所やコンテストで次々に変わる場面のようなものを意味し、何も哲学的な世界観といった抽象的な世界を考える必要はない。) もし再現していなければ、述語部は有意義になるまで展開されて行かねばならないだろう。Helbig が述語部の展開のしかたに Valenz 的なものを見ようとするならば、Valenz は意味論的な充足の問題と深くかかわってくる。充足を問題とするならば、存在のありかたが先ず指定されてなくてはならない。

いまかりに「結婚する」という述語があるとしよう。「私は結婚する」という、動詞一個だけである世界の有意義な状態が再現できるとしたら、その動詞は主語と結びつくだけで「構文論的に完全で、意味論的に有意義な文」をつくる。この世界では「結婚する」は1価の動詞である。主語に何をとりかても、その世界の充足条件に左右される。(日本語の世界では「結婚する」は1価である。) また、結婚には特定の異性が必ず関与し、その異性が表現されていなければ有意義な状態を表わしていないという世界では、「私は花子と結婚する」といわなければならない。(ドイツ語の世界では heiraten は1価でもよいが、目的語をつけて2価にした方がよいとされている。) また、結婚には仲人が是非必要で「…様の御媒酌により」と

いう要素がつかないと有意義な状態の再現とはならない世界においては、「結婚する」は3価である。

Helbigのように Proposition の構造を述語論理的に想定するならば、述語の展開のしかた、つまり、Valenz 構造は、述語の意味内容と言語外の世界との対応によってきまり、もし言語共同体に伝承されて来た動詞が一個だけで依然として現実の有意義な状態を再現できる場合には、それだけで「完全にして有意義」な文となりうるが、そうでなければ、「有意義な文」になるまで述語部を展開して行かねばならない。その場合、下位カテゴリーが目的語であれ副詞であれ、また前置詞句であれ、展開のしかたは自由である。(例：Ich besitze ein Haus. Es dauert lange. Ich hoffe auf die Zukunft.) また、いくら展開しても現実の事態を再現できなかつたり、展開のしかたが煩雑にすぎると新語や新造語を導入することになるであろう。(例：Ich greife die Stadt mit Bomben an → Ich bombardiere die Stadt.)

ドイツ語の世界では動詞 wohnen に伝承されている意味内容 (Wortfeld) は、現実の世界での有意義な状態の中には見あたらないと考えられている。そこで wohnen を使うドイツ文は、

(7) Der Lehrer wohnt in der Schule.

(8) Der Lehrer wohnt gut.

のように述語部を展開しなければならない。この事情は動詞 geruhen のような述語にもっとも明らかである。人は geruhen という語を聞いても、具体的な状態は何一つ再現できない。この語は必ず補わなければコミュニケーションには使えない。(Er geruhte, sich von seinem Platz zu erheben.)

(9) Der Lehrer bewohnt die Schule.

は、(7) と同じ現実の状態を再現する述語部を有しているが、構文は違っている。その違いは、いうまでもなく、wohnen と bewohnen の意味内容

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

(Wortfeld) の違いから来ている。論理的に言えば、述語の「定義」の違いからである。「意味論的な定義」から言えば、wohnen も bewohnen も単独では現実のドイツ語世界でいづれもそのままでは有意義になりえないような状態を意味し、場所／様態を補足するとはじめて明確なイメージを呼び起こす。「構文論的な定義」は、wohnen はこの場合前置詞 in と名詞によって展開され、bewohnen は 4 格の名詞によって展開されなければならないとされている。この二つの定義は伝承されて来たものであって、個人がみだりに変更を加えることは許されない。

意味論的な動詞の「定義」はメタ言語的に、対象言語とは別のレベルで行われている。自然言語の場合には現実の世界とは明らかに異なる古い世界での人間の認識構造からつくりあげられているものが多い。構文論的な「定義」も同様である。この場合は、言語構造の経済性とか、類似の意味内容(Wortfeld)を有する他の動詞との構造的関係などを考慮してつくられたものが多い。(例：an etwas denken ↔ sich an etwas erinnern.) Valenz とは、このように「定義づけられた」動詞のつくる述語部の展開と現実の世界での(最小の)認識上のパターンとの接点に出来る構造に他ならない。したがって、heiraten が 1 価であるか、2 価であるか、helfen が 1 価か、2 価か、展開は 4 格目的語か、前置句によるか、また、それらの下位カテゴリーの意味の範囲はどうなるのか、などは、まったく伝承されて来た意味論的・構文論的「定義」の内容と現実の世界における言語集団の認識パターンのダイナミズムによって定まるもので、これほど興味深い現象は他に類がないといってもよい。

構文論的な操作だけでは「完全で有意義な文」の定義ができず、深層構造で VP に直接従属する成分を (V を除いて) すべて共演成分といわざるをえなかった Helbig は、——彼の変形では ich liebe sie doch の doch を

共演成分から除くことも難しい。彼とても doch を共演成分と考えることはあるまい。——共演成分と必須共演成分の区別は表層での消去テストでなされるといっているが、認識論的・社会言語学的配慮の欠けている彼の理論では、どこまで消去が可能であるかについて具体的に何もいっていない。したがって、彼の辞書に記載されている helfen $1+(2)=3$ という Valenz の根拠は理論的にはなほだ薄弱であり、多くは彼と彼の Mitarbeiter たちの認識パターンの直観的な反映である。Valenz の根拠が薄弱ということでは、図 1 のような構造を想定して一種の Valenz 理論を展開しているアングロサクソン系の格文法についても同様である。格の種類や数を理論的に規定するには存在論をふまえた認識構造の分析が必要なのだ。

Valenz 理論には、このように動詞の意味論的定義と構文論的定義、さらに言語集団の認識パターンがからみあっているが、Helbig には意味論と認識パターンについての分析は見あたらない。彼は生成変形文法でやるように、構文の展開規則だけをまず経験的にこまかく記述しようと試みる。もし、認識パターンや意味論を先行させると、(Bondzio のように)言語構造と言語内容の 1 対 1 の対応を考えねばならず、er schreibt dem Vater と er schreibt an den Vater のように同じような内容の文が異なる構文を示す場合や、Thema-Rhema 構造のようなコミュニケーションのレベルでの意味論の処置に困るからである。構文論だけに的をしぼったことは、言語理論としての彼の Valenz 理論を貧しくはしたが、部分構造の記述をかえって精密化することになっている。Helbig の Valenz 理論の強みは、精密な構文規則を取り入れている点で、前置詞句に展開する場合も、例えば、方向規定や時間規定をつけ加えるとはいわず、具体的に、in とか auf とかを先ず指定し、次に名詞、不定詞、文などの具体的な文法範疇を規則としてつけ加える。自然言語の構文規則に忠実に従った彼の構文展開は、その正

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

確さでドイツ語教育にかつてないほどの貢献をしているが、すでに述べたように述語部の展開をどこでどのようにコントロールするかについてはかなり曖昧である。

意味論や認識パターンに対する反省が乏しいといっても、彼の理論にそれらが全然ないわけではない。一応、メタ言語的な Wortfeld の定義らしきものもあるが、多くは乏しい文例から推測しなくてはならない。そもそも「定義」は「いまの世界」の「一部の人」によってつくられたものではなく、過去から言語集団が受け継いだものである。もし、例文に使われたいくつかの現代ドイツ文だけからその内容を推測するとなると、偏った言語世界しか再現できないし、定義と定義の間関係、例えば Synonym とか Antonym の関係も不明のままである。だが、一番の問題点は意味論の基礎になる「存在のあり方」「世界」が固定していることである。「世界」は Helbig と彼の Mitarbeiter たち、せいぜいのところ、東ドイツの平均的市民の日常体験の場にすぎない。文の文法性、論理的に言えば、文の真偽判定はすべてその世界との対比のうえで決定されている。例えば、

(10) Er stirbt manchmal.

という文があったとする。Manchmal という副詞は、否定変形や枠構造テストを併用することによって、述語副詞であることがわかるから、この文は構文論的には完全な単一文である。しかし、Helbig の Valenz モデルでは疑いもなく非文法的な文となる。なぜなら、sterben は Helbig の想定する世界では生あるものが一度だけ体験することを意味し、manchmal という述語副詞と組み合わせがきかないからである。だが、sterben の意味内容はそれだけにつけているものだろうか。Stirb und werde! といった文はナンセンスなのだろうか。一度死んだと見なされ墓標を立ててもらった兵士が生還してきた場合、例文(10)は使えないだろうか。Colorless green

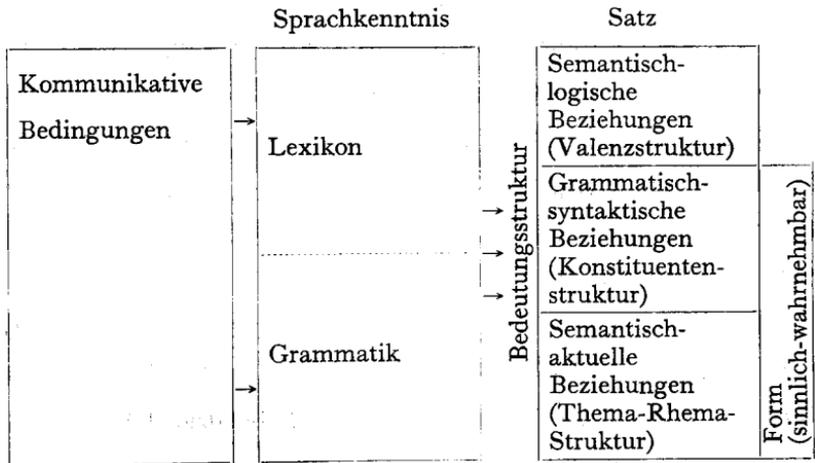
ideas sleep furiously を Katz/Fodor の意味論では解決できなかった生成変形文法と同じ問題点が Helbig の Merkmalsemantik に露呈している。

Helbig の Valenz 理論を端的にいうならば、彼は Valenz 理論として一般に唱導されて来た言語パターンの理論を生成変形文法の枠組の中で説明しようとしたが、自由添加成分の構文論的特性を発見したにとどまり、Valenz そのものの本質に切り込むことはできなかった。その原因は、生成変形文法理論に欠けていた社会言語学的 Gestalt 観を彼もまた持ちえず、そのうえ、彼の意味論は固定的経験的な Katz/Fodor の解釈意味論の借用にすぎなかったからであるといえよう。この言語理論が恣意的認識パターンを伴って規範的にドイツ語教育に強制されるならば、正確きわまりない構文規則を使って、ある特定の世界のあるグループの人達の Klischee 化された認識パターンを理論的反省もなく孜孜として再現することになる。そのことがドイツ語教育にとってどういう意味を持つのかは軽々しく判断できないが、Helbig/Schenkel 的な Valenz 理論を規範的に使用する Goethe Institut や Herder Institut の教材に対して、時として何ともいいようのない退屈さを感じることは事実である。Engel/Schumacher の Valenz 辞典では、意味論の理論的未完成を理由に、解釈意味論的な単一世界付与を避けている。恐らく、彼らの資料となった Mannheimer Corpus の多彩な文例を通して垣間みた多世界意味構造を理論的に整理記述するのに躊躇を覚え、また、動詞の意味内容(Wortfeld)のはかり知れぬ複雑さに恐れをなしたのかも知れない。しかし、何の説明もつけずに Mannheim 式構文パターンを「文法性」を理由に強制してくる点は Helbig/Schenkel と同じである。

W. Bondzio のいわゆる「意味論的 Valenz 理論」は、Helbig/Schenkel の「構文論的 Valenz 理論」とあらゆる点で対照的な理論である。Helbig/

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

Schenkel の言語教育のための理論という実践的傾向に対して、Bondzio は理論性を重視し、実践的なものを第一には考えていない。前者が米国の理論の影響の濃い構文論であるのに対して、後者はソビエトの理論の影響がうかがえる意味論である。そして、前者が自然言語の構文規則を忠実に取り入れ、それに解釈意味論を適用するのに対して、後者は概念の意味論的構造を重視し、自然言語の構文規則をしばしば無視する。この対照はある意味では生成変形文法と格文法ないし生成意味論の關係に似ていないこともない。Bondzio の言語理論は図式化すると次のようになる⁽⁹⁾。



左端にあるのはコミュニケーションの諸条件である。これには文の内容、話し手の意図、社会的状況、話し手と聞き手の言語能力などが属している。すべてこれらは言語外の事実である。この状況の中で自然言語の文がコミュニケーションの最小単位としてつくられる。それには話し手の言語知識

(9) Bondzio, W.: Grundzüge eines valenzorientierten syntaktischen Modells. (Mimeo.) 1977. Derselbe: Resümees der Vorträge gehalten in Ōiso, Japan. 1978

が必要で、その知識は Lexikon とそれを文につくりあげる規則、すなわち文法から成り立っている。ここでいう Lexikon とは、ある世界の中のある概念の総体で、言語化が可能であるものと考えてよいだろう。（必ずしも論理学でいう個物とは限らない。むしろ Entität と考えた方がよい。）この段階では品詞別は無視されているので、Lexikon といっても自然言語の具体的な単語のことではなく、概念としかいいようがない。しかも autosemantisch なものに限られ、接続詞や前置詞・代名詞などの内容にあたる概念は、Lexikon の中には入らず、文法の知識の中に入るものと考えられている。（論理的構力メカニズムが土台になっているが、und や oder をそのまま論理的 Satzkonnektor と考えたり、前置詞や代名詞の扱い方に難があるのは問題である。）Autosemantisch な概念の間には意味論的・論理的関係があると考えられる。例えば、「与える」という概念は「与える人」と「与えられる人」と「与えられる物」とが意味論的・論理的に考えられる。さらに、「与える」は「受けとる」との間にも意味論的關係がある。論理的関係とは「与える」が3項の Argumente を持つ述語ということで、意味論的關係とは、「人」や「物」といった充足条件、さらに「与える」と「受けとる」の間にみられるような述語間の「定義づけの関連」を考えている。この論理的・意味論的關係のすべてを Bondzio は Valenz 関係といっている。Helbig のように、認識のパターン構造を排除し、述語間の関連も考えず、「ある世界で有意義なコミュニケーションの土台となるための、定形動詞（述語）が必要とする最小の共演成分の数と構文論的性質、ならびにそれらの成分の semantische Merkmale」という考え方はない。Bondzio のいう Valenz は具体的な単語についての Valenz ではないので、この Valenz 概念は動詞だけでなく、名詞でも形容詞でも副詞でも autosemantisch な概念ならば何にでもあてはまる。このような Valenz

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

概念の拡大は Admoni などの ロシヤの 言語学者に見られるもので、⁽¹⁰⁾ Bondzio は事実、何にでも Valenz をあてはめて行く。例えば、Lehrer という概念は Schüler や Schule や Lehrfach と関係があるが、それらの関係はすべて Valenz 関係である。fleißig という概念は「何か」が fleißig なので、その「何か」との間に Valenz 関係がある。論理的には fleißig は一階の述語で、意味論的には Argument「何か」の充足条件と他の述語、例えば faul との関係があるというのである。これはまた大変な Valenz 理論である。ある世界での概念のネットワークを組立てる仕事であって、Helbig の Valenz モデルが最小の共演成分を伴ったコミュニケーションの構文論的単位であったのに対して、Bondzio の Valenz モデルは限定のない最大限の共演成分を想定しなければならない。もし、忠実にこのモデルに従って geben という概念の Valenz モデルをつくりあげようとする、Geber, Empfänger, das Gegebene だけではすまず、時間・場所・原因・動機・意向……と geben に関するあらゆる関連要項を考慮しておかねばならない。schneien や regnen などを含めて、一つ一つの概念にそれらの項目がいくつあるのかは誰にも即答できないし、つきとめられてもいない。だが、Bondzio 理論では、完璧な Valenz の項目カタログを揃えておく必要はない。すべては抽象的に考えられているので、自然言語の文がつくられる時に、主語部や述語部の展開にあたって、共演成分が意味の上から矛盾なく付け加えられる（日常体験の）知識の集積となりえていれば良いのである。つまり、体系的に集積されている Lexikon の構造が彼のいう意味論的・論理的概念関係で、これを彼は Valenz 構造と定義しているのである。

彼のいう Valenz 構造は言語外の概念の構造で sinnlich-wahrnehmbar

(10) Helbig/Schenkel: a.a.O. Einleitung.

な「形」ではなく、Helbig のという具体的な自然言語の動詞の構文規則とは明らかに別のものである。後者が自然言語の構文論を出発点として意味論へと進み、意味論のメタ言語として経験的世界の認識・構造を使用するといった経路をとるのに対して、前者は経験的世界の認識構造から出発し、その概念的再構成をはかって世界像をこしらえ、その世界像の反映として自然言語を「観察」しようとしている。東ドイツの学者でありながら L. Weisgerber の名前が時として口にされるのもうなづける考え方である。この概念世界は、いわば Weisgerber の die sprachliche Zwischenwelt であるが、その Zwischenwelt の構文論が述語論理学・関係論理学で構成されているのが Weisgerber にない特色である。人はこの概念世界を具体的に形として知覚することはむろんできない。

概念世界の構造がコミュニケーションの形として具体的に現われると自然言語となる。彼の考え方からすると、具体的な現われは自然言語に限られず、他のコミュニケーション・メディアであってもよいことになるが、その点については何も語っていない。言語がもっとも正確微細に概念世界を現わす形であることは間違いないが、概念世界を再現する場合に言語は異ったレベルで二つの構造をとるといふ。その一つは、文法的・構文論的構造であり、これは論理的なものを表現する Konstituentenstruktur である。他の一つは、語順とか音調とか省略に関係する論理的ならざる部分を表現する Thema-Rhema-Struktur である。以上が図式化された彼の理論の大略である。

彼が具体的な品詞の構文論を考えることなく、いきなり概念理論を展開していったのは、もともと名詞と名詞句の研究者として出発した彼が、名詞化現象を契機として文法全般の考察に入ったということからうなづけないことではない。論理学との結びつきは、あらゆる概念を述語ないし関数

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

としてとらえた G. Frege の影響であることは明らかである。名詞から概念、さらに Frege の論理学、そして意味論という理論的發展の経路は、動詞から Quine の数学的述語論理学、そして構文論という發展の経路をたどった米国などの行き方と比較して興味ある対照をなしている。

Bondzio の Valenz 理論は Helbig が排除した認識の構造が母胎となっているので一見すると両者は対立する理論のようにみえるが、実は相互に補いあって言語理論を形成するものである。ただ、両者の言語レベルは別である。Helbig が対象言語としての自然言語の構文論を展開しているのに対し、Bondzio は図式でもわかるように、自然言語の意味解釈の基礎となる概念世界の構文論（論理構造）と意味論（充足条件と述語間の関係）を展開しようとしている。Helbig は言語学を展開し、Bondzio は言語理論ないしメタ言語学を展開している。

Bondzio は、自分の理論はまだ開発の途上にあると考えており、未解決の問題として残されている部分は多いと述べているが、率直なところ、彼の理論はなるほど興味深い考え方ではあるが、技術的には幼稚である。まず最初に、メタ言語の分析と記述に使われる論理学的アパレートに問題がある。彼はそれをある時には述語論理学といい、ある時には関係論理学と称するが、現在の高度に発達し、高階の述語構造や内包・様相、さらに範疇論まであつまっている論理学からみると、一昔前の素朴な外延的述語論理にすぎない。現代の論理学では構文論と意味論は判然と区別されているのに、Bondzio の意味概念は明瞭ではなく、構文論との混称がみられる。例えば、概念世界でも意味構造と構文構造を区別し、全体として「対象言語の意味論的メタ言語の文法」とすべきところを、「意味構造 (Bedeutungsstruktur)」としてしまうなどはその一例である。内包や高階の意味関係をあつかえないために、メタ言語の構造記述は構文論的には何とかできて、意味論的

には充分にできないうらみがある。むしろ彼自身このことに気づいていて、「原則的には、これらのクラス（概念）の外延的關係と内包的關係が考えられる。……事実、自然言語にとっては、内包的定義が特に重要であるかも知れない。外延的定義、つまり、クラスに属する要素をすべて列挙することは、既に今まで事実として、關係のパートナーとして記録されてきているグループだけしか考えに入れることができないだろう。このような純粹に記述的なやり方では、今まで未知であったり、そんな關係に入れられたことのなかった關係パートナーを關係の中に入れるという言語特有の可能性を閉め出すことになる。と同時に、新しい内容を表現するという言語の重要な能力は考慮されないままになるだろう。それに反して、内包的定義は、いくつかのグループを潜在的な關係パートナーたちのクラスにそれぞれ振りわけのみに決定的な、不変の特徴を示すものである。そこでは新しい要素の振りわけ——と同時に“新しい文”の構成も——が可能である」¹¹⁾と率直に述べている。けれども、内包を記述するためのアパレートはぜんぜん持っていない。したがって、例文には内包的文脈を持つものを使用しない。また、副詞の構文論的特徴の一つとして、高階の述語構造をつくることに着目しているが、高階構造は一階の述語構造になおさない限り、現在の述語論理学では意味解釈が困難である。が、そのために必要なカテゴリー文法の構想は彼の理論には見あたらない。ただ、生成意味論にみられるような概念分解 (lexikalische Dekomposition) を、例えば、 $erzeugen(x, y) = x \text{ macht: } y \text{ existiert}$; $töten(x, y) = x \text{ macht: } y \text{ ist tot}$; $geben = x \text{ macht: } y \text{ hat } z$ などと考えているところをみると、カテゴリー論に無関心というわけでもなさそうだが、そのための方法論を考えた形跡はない。

(11) Bondzio, W.: Abriß der semantischen Valenztheorie als Grundlage der Syntax. I. Teil. In: Zeitschr. f. Phon. Sprachw. u. Komm. (1976)

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

Bondzio の概念文法は西側の概念文法、たとへば、格文法や生成意味論との親近性が強く、未発表の論文では格文法ならびに生成意味論の考察を本格的に開始していることがうかがわれるが、¹²⁾ 論理的な道具だてが貧弱だという点では三者は同じである。Lewis や Cresswell から意味論不在と批判された生成意味論や格文法の研究者たちは、論理的アパラートを強化し、内包論理・様相論理・カテゴリー文法を援用して、自然言語に近いシミュレーション言語を構成し、それによる翻訳を通じて自然言語の意味論を精密化しようとしている。Bondzio も恐らくその道をたどらざるをえないだろう。アパラートがととのわない限り研究は部分的関係現象にとどまらざるをえないが、事実、彼の研究は、壮大な Valenz 観を別にすると、実際にはすべて部分的なものにとどまっている。

Bondzio の文法は、既に述べたように、自然言語の文法ではない。概念の文法が自然言語の構造を無視して（例えば、品詞別とか、前置詞、接続詞、助動詞、冠詞、格など）強行されているのだが、この文法は実世界の写像を狙っているだけに世界の相対的把握を必要とする。つまり、内包と外延をつなぐ多世界構造である。概念の世界は言語外の世界なので一見 universal に見えるが、それは特定の世界（時間、場所、コンテキスト、話者）でのみ通用することで、世界のインデクス・パラメータが変ると通用しなくなることが予想される。その意味での相対的なものをも包含した Universalität が欠けていると、自然言語の直偽性（文法的に言えば文法性）の記述に支障をきたすことになる。彼も「(Valenz 構造の) 充足には意味論的な充足規則が適用されるが、この規則は現在のところ、むろんまだ充分にはわかっていない」¹³⁾と書いている。そして彼が繰り返し強調するの

(12) Bondzio, W.: Grundzüge eines valenzorientierten syntaktischen Modells. (Mimeo.) 1977

(13) Bondzio, W.: Grundzüge 1977

は、現実のコミュニケーションの条件からその規則は見つかるはずだということである。Bondzio の抽象的 Valenz 構造は現実のコミュニケーションの社会言語学的認識構造から帰納的につくりあげられたものであることがわかるが、こうして帰納的につくりあげられ、記述のアパレートの不備から多くの重要なコミュニケーション現象を捨象してしまったモデルが、その母胎である自然言語の構造をうまくシミュレートできるかどうかは問題であろう。

Bondzio は彼のいわゆる意味論的・論理的 Valenz 構造、つまり、メタ言語の構造を具体的な自然言語の Konstituentenstruktur に直結して考えようとしている。しかし、Helbig がいうように、直結できるような構造ばかりが自然言語にあるとは限らない。次のような例の区別を Bondzio 理論でうまく説明できるとは思えない。

(12) Ich erinnere mich an die gute Zeit.

(12') Ich erinnere mich der guten Zeit.

(13) Es gibt einen guten Freund.

(13') Ein guter Freund ist da.

(14) Mich friert.

(14') Ich friere.

(15) Der Sohn ähnelt seinem Vater.

(15') Der Sohn ist seinem Vater ähnlich.

Bondzio 理論では関係概念の把握が Reichenbach の Elements of Symbolic Logic¹⁴⁾ の自然言語の分析における関係概念の把握までも到達していないのに加えて、上記(12)―(15')の文と Bondzio の考えている概念言語とは言語のレベルが異っているからである。Bondzio に求められるのは概念言

(14) Reichenbach, H.: Elements of Symbolic Logic. 1947

Valenz 理論における自然言語のパターン化とその「意味論」について

語と自然言語を結びつける理論なのだ。

だからといって Bondzio の言語理論が自然言語の文法ないし構造の理解のために無縁のものということには決してならないだろう。人はまさしく Bondzio が構想しているような意味内容を「言語を使って」表現し、伝達しようとしているのだから。問題はその両者をいかに理論的につなぐかである。現在考えられているのは、自然言語の具体的な構文と概念的意味論言語の双方を包含できる翻訳言語の使用である。そのために使用されるのは論理的な意味論言語であろうが、それに内包記述、多世界構造を付与し、状況に応じて真理値（言語学的に言えば、意味論的文法性）が変るような装置をつけておけば、自然言語の構文と意味構造をある程度までシミュレートできる可能性がある。¹⁵⁾

概念だけから出発すると、(12)―(15') などのような同義異構造の文の説明がうまくできないし、研究者が概念的によくわかっていない意味構造（例えば、量子子の概念、様相など）は記述からもれてしまうことになるであろう。逆に Helbig のように自然言語の構文論的事実だけから出発すると、未経験・未知の概念まで組み入れて有意義な文をつくり出す言語の創造性を記述できない。自然言語の構文を忠実に包含し、かつ、話者の概念世界における真偽性をも判定できる論理的意味論言語の開発が待望されるゆえんである。

Bondzio も Helbig も自分の理論を Valenz 理論と称しているが、Bondzio の理論は Ontologie 的背景を欠いた概念の構文論と述語概念の定義づけであり、Helbig の理論は生成変形文法の句構造方式に他ならず、両者ともパターン化としての Valenz の本質を分析しているとはいいがたい。

(15) Montague, R.: Formal Philosophy. 1974. Cresswell, M. J.: Logics and Languages. 1973

さらに、両者とも自分の理論が言語教育に役立つことを自負している。Helbig の理論は既に述べたように、正確な構文はつくれるようになるが、彼の恣意的な傾向を有する Valenz モデル（述語部分の展開の最小パターン）に影響されて、十分な述語展開の傾向にブレーキがかかり、ドイツ語文の内容が類型化画一化されるおそれがある。Bondzio の理論は、ドイツ人の有機的な概念世界を説明してくれるために、ドイツ文で表現された意味内容をドイツ人と同じように理解するのに役立つが、対象言語の構文論を欠いているので、具体的なドイツ語を規則通りにつくるのに役立つかどうかは疑わしい。両者は言語教育に応用されるにあたって、互いに補完しあう関係にある。両者に共通していることは、論理が外延的思考に終始し、世界像・状況の理解が固定していることである。自然言語は今までに経験したことのない事態でも、現実に存在しえない事態でも、有意義に表現できる構造を有している。これは現在開発中の内包と多世界をも包含した存在論的意味論によってのみ記述できる。Helbig と Bondzio の理論に、固定した世界での既存の秩序の言語理論という印象を受けるのは、言語の創造性まで記述できる真の意味論はまだ両者に備っていないということになるのではあるまいか。

付記 本稿の作製にあたっては、来日された W. Bondzio 教授の有益な解説と資料の提供に負うところが多い。ここに付記して感謝の意を表する。